

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5

285
15

日曜学校提要

始



日曜學校提要

本願寺學務部發行

上欄目次

聖訓 一七
 正信偈 二
 十二禮 一一
 頌解文 一六
 讚佛歌 一七
 佛の御手(始業) 一七
 佛教青年會歌(右同) 一八
 幸ある我(終業) 一九
 清きまごぬ(右同) 二〇
 樂しきまごぬ(右同) 二一
 報恩講の歌 二二
 聖德太子奉讚歌(太子會) 二四
 御法の春 二六
 花祭の歌(釋尊降誕會) 二八
 宗祖降誕會の歌 二九
 秋のあつまり(秋讚佛會) 三一
 追申の歌(追申會) 三三

下欄目次

一、例日行事及時間割 一
 二、例日行事要項 二
 三、年中行事 九
 四、校訓 一一
 五、教師心得 一一
 六、訓練要領 一一
 七、教授要領 一二
 八、管理要領 一三
 九、學校衛生 一八
 二〇、日曜學校法要摘要 一九
 附 錄 三二
 佛教日曜學校の使命と其精神 三二
 家庭に於ける宗教々育 三三

聖訓

一、教化するは、まづ信心をよく決定して、そのうへにて聖教をよみ、かたらば、きくひま信をさるべし。
 一、聖教をすきこしらへもちたる人の子孫には、佛法者いでもものなり。一たび佛法をたしなみさふらふ人は、おほやうなれどもおごろきやすきなり。
 一、蓮如上人幼少なる者には、まづ物を讀めど仰せられ候。又其後はいかによむとも復せずば詮あるべからざる由仰せられ候。ちよ物に心も付候へばいかに物をよみ聲をよく讀しりたるも義理をわきまへてこそ仰られ候。其後はいかに文釋を覺たりとも、信がなれば、いたづら事よこ仰せられ候。
 一、おかしき事態をもさせられ、佛法に退屈仕候者の心をも、くつろげ其氣をもうしなばして、又あたらしく法を仰られ候。誠に善巧方便ありがたき事なり。
 一、わが妻子はご不便なるこそなし。それを勸化せぬばあさましきこそなり。
 — 蓮如上人御一代記開書 —

目的

眞宗二諦の教義に依り、兒童の宗教心を啓培し、徳性を涵養するを本旨とす。

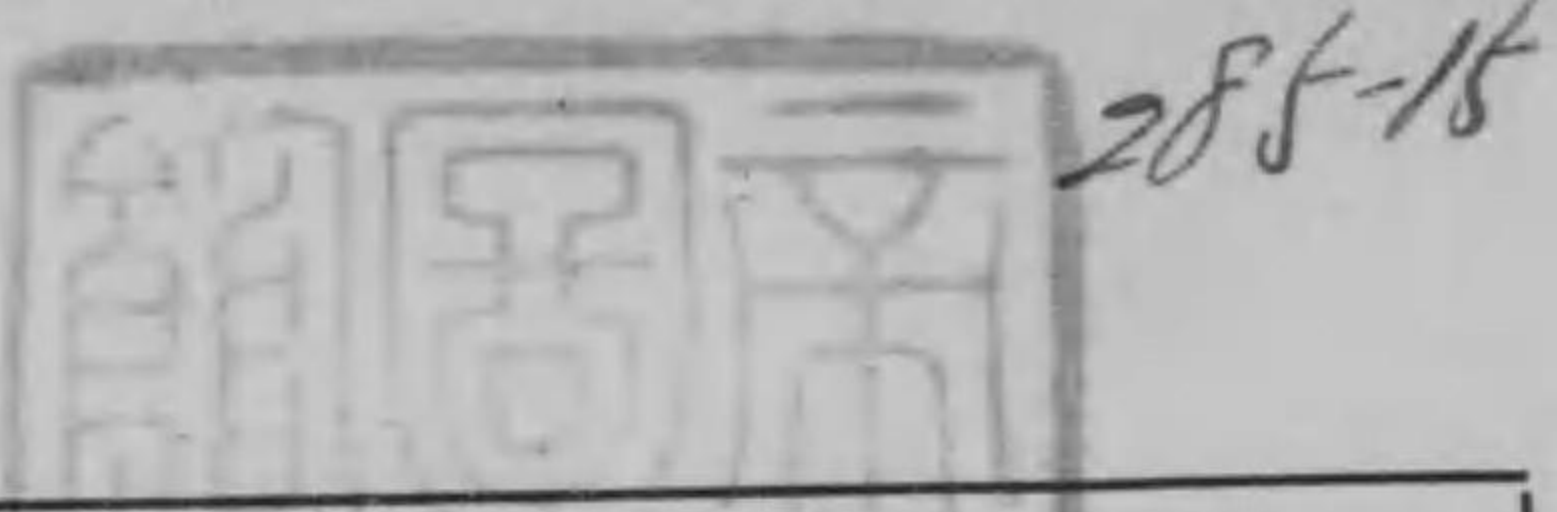
一、例日行事及時間割

各個の禮拜 出席カード 捺印
 登校後直ちに 正
 意 振鈴、午前八時五〇分 大
 九、〇〇 九、四〇

正 大 寄贈
 9 8 17
 寄贈

開禮焼香(生徒總代)拜扉
 勤式佛領解文偈 合級
 閉禮法讚 九、四〇
 誦佛歌遊戯教授話 分級 九、五〇
 級 一〇、二〇
 級 一〇、二〇

一部寄贈本



正信偈

普重五超建國觀在法南歸
 放誓劫發立土見世藏無命
 無名思希無人諸自薩不無
 量聲惟有上天佛在薩可量
 無聞之大殊之淨王因思壽
 邊十攝弘勝善土佛位議如
 光方受誓願惡因所時光來

應五唯如必成至本一超不淨無
 信濁說來至等心願切日斷淨碍
 如惡彌所滅覺信名群月難歡無
 來時陀以度證樂號生光思喜對
 如群本與願大願正蒙照無智光
 實生願出成涅爲定光塵稱慧炎
 言海海世就槃因業照刹光光王

二、例日行事要項

始業に關する準備

- 一、前日迄になし置くべき分
 - 教室校庭の清潔
 - 危険物に對する手當
 - 教授草案の作製
 - 校長教辨の整理
- 二、當日の分
 - 佛壇の莊嚴に遺漏なきを期すること
 - 教室を明け放ちて空氣を置換すること
 - 採光の方法宜しきを得ること
 - 溫度の注意、嚴冬は暖室を講ずること
 - 校具を所定の場所に置くこと

兒童登校の際の注意

- 一、下駄、傘、其他持物の整理 男女別に下駄は向ふ向きに整理せしむ(助手注意)
- 傘・其他の持物には名札を附けしめ置くこと。
- 二、各個の禮拜 登校後必ず直ちに各個に佛前に稱名禮拜せしむ。
 主任は可成佛前に横向に座して其の狀を觀、動拜の後主任に挨拶せしむ、主任は努めて和顏を以て對し登校を觀迎するの注意を不言の裡に表はすべし。
- 三、カード捺印 右終りて其の傍に在る助手、出席カードに出席の印を捺す、此の間主任は兒童の健康狀態、服裝、舉止等に注意して個性の觀察を怠るべからず。

集合及解散

- 一、用意 集合約五分前振鈴若くは呼子笛等の合圖をなして始業の用意をなさしむ。
 遊戲中の兒童は遊戲を止む、催便のものは此の間に辨せしむ。
- 二、集合 振鈴とともに操側に整列、身長者を後に、男女各二列の縱隊を可とす。

一、即獲雲譬常貪已攝如凡不能
 切橫信霧如覆愛能取衆聖斷發
 善超見之日眞瞋雖心水逆煩一
 惡截敬下光實憎破光入謗惱念
 凡五大明覆信之無常海齊得喜
 夫惡慶無雲心雲明照一廻涅愛
 人趣喜聞霧天霧聞護味入槃心

爲釋明顯中印難信邪彌是佛聞
 衆迦如大夏度中樂見陀人言信
 告如來聖日西之受憍佛名廣如
 命來本興域天難持慢本分大來
 南楞誓世之之無甚惡願陀勝弘
 天伽應正高論過以衆念利解誓
 竺山機意僧家斯難生佛華者願

四

(號令)氣を付け……前に並へ……直れ。

此の間教師は生徒の直前に立ち全列に視線を配る
 三、着席 列をなして努めて静かに教室に入る。(此の
 間進行曲を用ふるを可ます) 椅子なき所にては、
 可成疊の節目に依り列を正さしむるを便とすかく
 て位置定まりたる後一齊に着座せしむ。

四、解散 一齊に座席より起立せしむ、列をなして順
 次後側に整列す。

佛壇に對する注意

- 一、莊嚴 開會の都度必ず新花を供ふ、香華燈明型の
 如し。
- 二、教師 佛前に於ける起居動作は最も用ひて範を示
 すべし。
- 三、兒童 脊を向けて座せぬこと、足を向けぬこと。
 佛前を通行の際は必ず禮拜して過ぐることを。

開扉及閉扉

此の間兒童各自に合掌稱名す
 禮拜

禮拜は多數兒童の場合には、樂器を奏して教師兒童共一齊
 ならしむるを可ます。

燒香

燒香は佛に對し奉りて恭敬の意を致すものなることは言
 はすもがな、縷々たる香煙の相を見、香氣を嗅覺に訴ふ
 ることを得るものなれば兒童の氣圍氣を清淨にするに最
 も適當なり、又佛教儀禮に稱はしむる上よりいふも嚴肅
 に執行するの要あり。

先づ主任、佛前の中央に、毎週輪番の兒童各一生は其の
 左右に座す、全員の着席終りて主任は徐ろに起ちて禮拜
 燒香二捻す、男生、女生次々に之を倣ふ此の間方法宜し
 きを得ば全生の心理妙に嚴肅味を加ふるものなり。

勤行

一、正信偈 宗義の要諦として、眞宗教義史、佛教史
 の骨目として、晨昏拜誦すべき聖典として、或特
 別なる場合を除く外、日曜學校の必須科として教
 授、奉唱せしむるを要す。
 依經、依釋の兩段を隔週に唱へしむる日曜學校も
 あり、且らく記して參考とす。

依歸天應唯自憶信顯證宣悉龍
 修命親報能然念樂示歡說能樹
 多無善大常即彌易難喜大摧大
 羅碍薩悲稱時陀行行地乘破士
 顯光造弘如入佛水陸生無有出
 眞如論誓來必本道路安上無於
 實來說恩號定願樂苦樂法見世

勤行終了後、動もすれば雑話を交ふる兒童なきに
 しもあらざるべし、最終に點鐘三打すれば克く靜
 肅なるを得、古聖の用意欲すべきなり。

二、十二禮 淨土の依正を讚歎せる龍樹菩薩の偈の尊
 重すべきは言ふも更なり、其の曲譜の微妙にして
 應用の廣く、且つ學び易き、梵唄集中、兒童の奉
 唱するものとして之を教授し、正信偈を平日に、
 十二禮を特別行事の日に奉唱せしむる日曜學校も
 あり、且らく記して參考さす、若し夫れ「故我頂
 禮彌陀尊」の一句は幼童なほ誦するを得べく、曲
 節ある文は無曲の文よりも兒童の記憶に利あるは
 人の知る所なり。

三、領解文 一宗安心の要義收めて此の一卷に在り、
 領解出言相續誤りならんことを期せしむるため
 特に此の課を設けて奉唱せしむべし。
 始めは廣紙に記して齊讀せしむ、但勤式、兒童に
 さらして長きに失するの虞ある時は集りの最後に唱
 へしむるも可なり。

讀佛歌 上欄記載
 一、行事に用ふるもの

梵三常本入遊即得必歸爲廣光
 燒藏向師生煩證至獲入度由闡
 仙流鸞曇死惱眞蓮入功群本橫
 經支處鸞園林如華大德生願超
 歸授善梁示現法藏會大彰力大
 樂淨薩天應神性世衆寶一廻誓
 邦教禮子化通身界數海心向願

二、例日始業終業の際用ふるもの 上欄記載
 此の外光(サンアツ歌第二)紅百合(サンアツ歌第
 十三)等常に用ゐらる。

二、教授法 音樂の人心に及ぼす感化の偉大なるや喋
 々を須ひず。されば日曜學校關係者は直接音樂を
 擔任せるものと否に拘らず、全教師が兒童に先
 だちて之に習熟するを要す、習熟すれば兒童に對
 する自信と、興味とを益す、自信と興味、蓋し巧
 妙なる教授法の生るゝ母なり。

三、教授の階段
 1、示範 新教材の題目を示し内容を説明したる後一
 二回模範を示し、兒童の求知心を喚起す。
 2、説明 曲譜の高低、時間、強弱、發想、音量等に
 つき説明す。
 3、練習或は樂器を伴奏し或は教師指揮し或は兒童拍
 子をとりて、兒童をして歌はしむ。
 右階段は一個の歌曲を數節に分ちて教授し、適宜繰返す
 も可なり。
 少くとも前記讀佛歌は掛圖になし置くを便さす。

三圓萬唯道諸必證惑正往報天
 不滿意善明練有至知染定還土親
 三德自淨決衆無生凡之廻因善
 信號力土聖生量死夫因向果薩
 誨勸貶可道皆光即信唯由顯論
 慰專勤通難普明涅心信他誓註
 懃稱修入證化土槃發心力願解

一、赤心を披瀝して佛徳を讃歎すべし必ずしも能辯なるを要せず。

二、自己を本位とせず兒童の理解を本位とすべし。

三、兒童の日常生活と連絡を保たしむべし。

四、小學校終身科と連絡を保たしむべし。

五、例話としては努めて佛教高僧傳に取材すべし。

童話

一、材料

1、可成宗教的の童話を選ぶべし。

2、兒童の心理に適合せるものを選ぶべし。

3、優美高尚荷も野卑ならざらんことを努むべし。

4、空想を助長する嫌あるものを避くべし。

5、國民性を助長するに足るものを選ぶべし。

二、方法

一、口で語るより眼で語れ。

二、語らざる時に己に語り居るものなるを忘るな。

三、咽喉の手當より呼吸を練れ。

四、手を使はざることに苦しむより足を動かさざることを思へ。

五、自分の言語に使はれな

偏源即與慶行開光矜善至一像
 歸信證章喜者入明哀導安生末
 安廣法提一正本名定獨養造法
 養開性等等念受願號散明界惡滅
 勸一之獲相金大顯與佛證值同
 一代常三應剛智因逆正妙弘悲
 切教樂忍後心海緣惡意果誓引

- 六、最も少き言語にて最も多く語らんことを工夫せよ
- 七、態度は壓力なり。
- 八、語らざるを得ざる話を選め。
- 九、興味を以て語れ。
- 十、よく語らん事を努めんより、よく聽かせん事に注意せよ。(久留島武彦氏登壇十訓)

終業の後

- 一、教師は兒童の退散し終るまで校門の邊にて見送り態るに、歸途を戒め、次週に出席するやうにすべし。
- 二、日記其他諸表簿整理。
- 三、校具等の始末
- 四、次週の準備
- 五、闕席兒童の調査及び家庭訪問

三、年中行事

月 當日日曜にあらざるまきは其の最寄の日に行ふ
 日 行事 摘要
 四 第一日曜 入校式 新入校生を觀迎し在來者は新入生を愛し、新

速決還選眞憐本大煩我極報專
 入以來擇宗惑師悲惱亦重化雜
 寂疑生本教善源無障在惡二執
 靜情死願證惡空倦眼彼人土心
 無爲輪弘與凡明常雖攝唯正判
 爲所轉惡片夫佛照不取稱辨淺
 樂止家世州人教我見中佛立深

- 一〇 入生は安じ勇みて登校するやうにすべし。
- 四 八 釋尊降誕會 灌佛花祭等をなす
 - 五 二一 宗祖降誕會 聖典 御傳鈔上第一段
 - 七 第一日曜 展覽會、保護會
 - 九 彼岸中日 追弔會、
 - 一〇 第一日曜 遠足 豫定案を立て、年々異なる方面に向ふべし。
 - 一〇 第三日曜 老人慰安會 主として會員をして周旋するの任に當らしむ
 - 二 最終日曜 歳末の集り 聖典 歳末の御禮の章(蓮如上人御一代記開書)
 - 一 第一日曜 新年の集り 明應二年正月の章 (右同)
 - 一 一六 報恩講 聖典 御傳鈔下第六段 子供御齋
 - 二 一五 涅槃會
 - 三 彼岸中日 太子會 聖典 御傳鈔上第三段
 - 三 最終日曜 進級會、精勤證授典、青年部編入

奢金無在阿稽 唯道拯弘必
 摩色量彼彌首 可俗濟經以
 他身佛微陀天 信時無大信
 行淨子妙仙人 斯衆邊士心
 如如衆安兩所 高共極宗爲
 象山圍樂足恭 僧同濁師能
 歩王繞國尊敬 說心惡等入

- ### 四、校訓
- 一、私を守つて下さるみ佛様の慈悲のみ名をこなへませう。
 - 一、私を可愛がつて下さるみ佛様を拜んでお禮を致しませう。
 - 一、私の行ひを見てゐて下さるみ佛様を信じて善い心掛の人となりませう。
- ### 五、教師心得
- 一、上道を求め下化を布いて勇猛不退なるべし。
 - 一、獨自の生命の尊きや貴賤長幼差の簡ぶ所なし宜しく大悲傳化の慈心を施すべし。
 - 一、兒童に對する常に和顏愛語を以てすべし。
 - 一、堅忍持久は百の經營法に勝る。
 - 一、須く兒童を理解し同情を以て教養に従ふべし。
- ### 六、訓練要領
- 一、誘導的訓練 肯定、贊助、褒詞、褒賞、照護。
 - 二、抑制的訓練 否定、制止、訓誡、叱責、冥加

所衆無故能種觀故聲威面故兩
 作德比我伏種音我如光善我日
 利皎無頂外妙頂頂天猶圓頂淨
 益潔垢禮道相戴禮鼓如淨禮若
 得如廣彌魔寶冠彌俱千如彌青
 自虛清陀僑莊中陀趨日滿陀蓮
 在空淨尊慢嚴住尊羅月月尊華

故瞻顯十故於善金故爲無十故
 我仰現方我彼根底我諸量方我
 頂尊神所頂座我寶頂衆諸名頂
 禮顏通來禮上成間禮生魔聞禮
 彌常至諸彌如妙池彌願常苦彌
 陀恭安佛院山臺生陀力讚薩陀
 尊敬樂子尊王座華尊住嘆衆尊

訓練 一、善き事をなす機会を與へよ悪き事をなす
 機会を與るな

要訣 二、訓練は事前に褒詞は事後に

三、宗教教化の要は照護と冥加とを信知せし
 むるにあり。

四、「可愛くば三つ教へて二つほめ一つ叱り
 て善き人にせよ。」

七、教授要領

一、教授の形式

- 1、講演式感動を惹き、未知を授け、事實を髣髴せしむる利あれども單調に流れ教師本位に陥り易し。
- 2、問答式教授に活氣與へ記憶を新たにし、已知を調査し兒童本位にする等の便あれども、感動を惹起するには効少し二者教材に應じて適宜合せ用ふべし。

二、教材排列

- 1、圓周的排列毎年同教材を繰返して漸次詳を悉す。
- 2、階段的排列初年級までを教材進行の階段とす。

三、教授の階段

1、知識方面 豫備(目的指示豫備等)

教授(提示)
 整理(比範、應用、總括等)

2、技能方面

示範
 說明
 應用

四、壇上要訣

- 1、活氣は教授の七難を隠す。
- 2、視線を全生に配るべし。
- 3、準備の周到なるは教授成功の基なり。
- 4、聲は低きを尙ぶ。
- 5、問は全體に發て然る後或者に答へしむべし。

八、管理要領

一、分級法

1、始め開校の際。若くは教師、教室の不足する場合
 は、全生合級とするを妨げずと雖、漸く進めては可
 成細部に分級するを可とす、教師は助手をして下級
 生の伴侶たらしめ、教室は廣き一間の各隅に分野す
 る等の方法を講ずれば分級必ずしも難事に非ず。

我^ガ故^コ衆^{シュウ}亦^ヤ彼^ヒ故^コ往^ワ無^ム彼^ヒ故^コ爲^キ亦^ヤ諸^{シュ}
 說^セ我^ガ人^ニ無^ム尊^ソ我^ガ生^{シヤ}有^ク尊^ソ我^ガ衆^{シュウ}如^ニ有^ク
 彼^ヒ頂^{テイ}至^シ女^ニ佛^ツ頂^{テイ}不^フ諸^{シュ}無^ム頂^{テイ}說^セ水^{スイ}無^ム
 尊^ソ禮^{レイ}心^{シン}人^ニ說^セ禮^{レイ}退^{タイ}趣^{シュ}量^{リヤウ}禮^{レイ}法^フ月^{グツク}常^{ジョウ}
 功^ク佛^ツ敬^{キヤウ}惡^{アク}無^ム彌^ミ至^シ惡^{アク}方^フ彌^ミ無^ム電^{デン}無^ム
 德^{トク}陀^タ彼^ヒ道^{ダウ}惡^{アク}陀^タ苦^ク知^チ便^{ベン}陀^タ名^{ミヤ}影^{ヤウ}我^ガ
 事^ジ尊^ソ尊^ソ怖^フ名^{ミヤ}尊^ソ提^{タイ}識^{シキ}境^{キヤウ}尊^ソ字^ジ露^ロ等^{トウ}

一四

- 2、分級の標準を年齢とするこ小學校學年とするこの別あるも、普通學年に依るを便とす、其他年度の始終等も小學校のに準ずるを便とす。
 - 3、分級する際も儀禮に關する行事は合級するを可とす、其の順序前記例日行事表の如し。
 - 4、左に分級の一例を示す。
 月組 四年以上男
 雪組 四年以上女
 花組 三年以下男女
 - 5、漸次男女別に、青年部、壯年部、老人部、師範部を設けんことを努むべし、又別科として定休日には店員、労働者農業者等のために開催すべし。
- 二、職員
 校長 一名
 教師 級擔任を設く數名
 助手 後援會幹事數名
 三、入校
 左記用紙に記入申込ましむ用紙を纏めて、學籍簿とす。

願^{ガン}所^{ショ}衆^{シュウ}
 共^ク獲^{カツ}善^{ゼン}
 衆^{シュウ}善^{ゼン}無^ム
 生^{シヤク}根^{コン}邊^{ベン}
 生^{シヤク}清^{シヤク}如^ニ
 彼^ヒ淨^{シヤク}海^{カイ}
 國^{クニ}者^{シャ}水^{スイ}

和 讚

超^{テウ}日^{ニツ}月^{ゲツ}光^{クワウ}この身には
 念^{ネン}佛^{ブツ}三^{サン}昧^{マイ}おしへしむ
 十^{ジュウ}方^{フウ}の如^ニ來^{ライ}は衆^{シュウ}生^{シヤク}を
 一^{イツ}子^シのごとく憐^{レン}念^{ネン}す。
 子^コの母^{ハハ}をおもふがごとくにて
 衆^{シュウ}生^{シヤク}佛^{ブツ}を憶^{オク}すれば
 現^{ゲン}前^{ゼン}當^{タウ}來^{ライ}とをからす
 如^ニ來^{ライ}を拜^{ハイ}見^{ケン}うたかはず

書 ^{シヤク} 込 ^コ 申 ^{シン} 學 ^{ガク} 入 ^{ニユ}				佛 ^{ブツ} 日 ^{ニツ} 教 ^{キヤウ} 曜 ^{ヤウ} 中 ^{チュウ} 央 ^{オウ} 校 ^{ガク}	佛 ^{ブツ} 日 ^{ニツ} 教 ^{キヤウ} 曜 ^{ヤウ} 中 ^{チュウ} 央 ^{オウ} 校 ^{ガク}
考 ^{コウ} 備 ^ビ	氏 ^シ 名 ^{メイ} 印 ^{イン}	住 ^{ジュウ} 所 ^{ショ}	保 ^ホ 護 ^ゴ 者 ^{シャ}	住 ^{ジュウ} 所 ^{ショ}	氏 ^シ 名 ^{メイ} 印 ^{イン}
申 ^{シン} 込 ^コ 年 ^{ネン} 月 ^{ゲツ} 日 ^{ニツ}	大 ^{ダイ} 正 ^{テイ} 年				
	業 ^{ゲツ}	職 ^{ニツ}			
				學 ^{ガク} 校 ^{コウ} 第 ^{テイ}	年 ^{ネン} 生 ^{シヤク}

- 四、出席獎勵法
- 1、出席カードに捺印 毎 回
 - 1、組別出席歩合優良旗授與(交替) 毎 月 一 回
 - 1、每半期精勤者褒賞授與 年 二 回
 - 1、一ケ年間精勤者褒賞授與 年 一 回
 - 1、出席督促狀送付(印刷物) 其 部 度
- 近頃は御出席がないやうですがおさはりではありませぬか。そうでなかつたらこの次からは御出席下さい。おまちしてゐます。
- 年 月 日 學 校 名

領 解 文

もろくの雑行雑修自力のころをふりすて、一心に阿彌陀如來我等が今度の一大事の後生御たすけ候へとたのみ申して候たのむ一念のとき往生一定御たすけ治定と存トこの上の稱名は御恩報謝と存トよろこび申候この御ことはり聽聞申しわけ候こと御開山聖人御出世の御恩次第相承の善知識のあさからざる御勸化の御恩とありがたく存ト候この上は定めをかせらるゝ御掟一期をかぎりまもり可申候

佛の御手

一 佛のみ手に
我等は引かれ
樂しき國に
いざや行かなん

(折返し)

ああ御佛

ああ御佛

ああ御佛

我を愛す

二 我等の罪も

佛の御手に

まかせまつれば

様

五、設備

一、家庭訪問

佛壇 莊嚴至重なるべきこと言ふまでもなし

教室 掲示(聖典の文、校訓、訓言)掛物、額、校旗、

黒板、机、オルガン、唱歌掛軸、掛圖等

圖書 兒童讀物、信仰修養の書類を提供して相當の監

督の下に閱覽せしむ

遊戯用具 ビンボン、輪投げ、達磨落し、投球盤等

六、帳簿

學籍簿、教師出閣表、兒童出閣表、日記、教案、會計

簿、參觀人名簿等、

七、事務分掌

一、兒童監護係

履物注意(昇校、退散)
遊具、遺失物整理
監護 危険防止
制限外の所に立入らぬやう
親しく快活に遊ぶやう

一、教室整理係

表彰旗、通風、採光
教具、出閣表の整理等

一、カード係

カード捺印 昇校禮拜の後
閱覽室受持、給品係

八、連絡

- 1 小學校(參觀、小學校教師來講小學校學科進度取調、小學校との協調)
- 2 家庭(父兄の參觀、家庭訪問、父兄會年一回、展覽會年一回、入學の際父兄と會談協議)
- 3 後援會を組織し門信徒の理解と後援を得、且つ經費等の援助を得るやうにすべし。(兒童より直接會費を徵集するは動もすれば不結果に終るものなれば再三熟考の上にするべし。)
- 4 最寄日曜學校は互に氣脈を通じ、教化の統一連絡を計り、又或範圍の聯合團體を作りて相互の研究、連絡に便すべし

九、學校衛生

- 一、換氣法 冬季殊に注意すべし
- 一、溫度
- 一、採光
- 一、視力 時に左列生と右列生を入れ替へ、分級の際は時々教室を交替すべし
- 一、姿勢 時々直立、或は姿勢の轉換をなすべし

我が世は安し

三 いざ我が友よ

手を取りあひて

佛のをしへ

共に聞かなん

佛教青年會歌

一 わが日の本の榮ゆる國

佛の光照らすどころ

嬉しやわかき生命得たり

惠み仰がんよろづ代まで。

二 尊ごき御國くしき御法

又なき文の續くどころ

うれしや若き生命得たり

惠み仰がんよろづ代まで。

幸ある我

一 小鳥の聲に夢さめて

慈悲の御親を拜しつ

樂しき今日を思ふとき

幸ある我を歌ふなり

二 學の庭に、はた家に

おのがつとめをなしとげて

佛の惠 思ふとき

幸ある我を歌ふなり

三 夕樂しきまごゐして

- 一、清潔 教室、衣服、身體、
- 一、傳染病 流行の兆あるときは嚴重に警戒すべし、
トラホーム、疥癬、疫病等亦然り

一〇、日曜學校法規摘要

佛教日曜學校規程(大正四年七月 甲教示第十五號)

- 第一條 本規程ハ派内一般ノ佛教日曜學校ニ適用ス
- 第二條 佛教日曜學校ハ本宗ニ歸ノ教義ニ依リ特ニ兒童ノ徳性ヲ涵養スルヲ以テ目的トス
- 第三條 前條ノ目的ヲ達センカ爲メ小學校及ヒ家庭ト聯絡ヲ取り日曜日ヲ利用シ宗教及ヒ道徳ノ要旨ヲ授ケ但シ地方ノ狀況ニ依リ兼テ手藝作法等ヲ授クルコトヲ得
- 第四條 佛教日曜學校ニ擔當者ヲ置ケ
- 擔當者ハ派内住職又ハ教師ニ限ル
- 第五條 前條擔當者ノ外其ノ校ノ事情ニ依リ必要ナル職員ヲ置ケコトヲ得
- 第六條 佛教日曜學校ヲ設立セントスルモノハ擔當者ニ於テ規則ヲ制定シ組長管事ヲ經由シ本山ノ認可ヲ受ケ
- ハシ規則ニハ左ノ事情ヲ規定スルコトヲ要ス

智慧と慈悲とにまもらるる

嬉しき此の身 思ふとき

幸ある我を歌ふなり

四 げに幸なりや幸なりや

憂へ悲む人の世に

樂しき慈悲に育ちつつ

幸ある我を歌ふなり

清きまとゐ

一 清きまとゐいざ友來よ

我等は皆慈悲の子よ

愛みの花咲く園

御親はごく待ちませり

- 一、名稱
- 二、位置
- 三、目的
- 四、事業
- 五、職員
- 六、校務

第七條 各日曜學校ハ毎年二回三月末日九月末日マテニ學事報告ヲ直接本山ニ差出スヘシ但シ報告ノ様式ハ別ニ之ヲ定ム

第八條 佛教日曜學校ノ經費ハ地方有志ノ喜捨金若クハ會金ヲ以テ之ニ充ツルモノトス

附則

本教示ハ發布ノ日ヨリ施行ス

派内佛教少年會ハ本規程ニ準ス

兒童表彰ノ件(大正四年七月)

一、各校ノ兒童中成績最優等ノモノ一校二名(男女各一名)ニ對シ毎年一回一本ヨリ表彰「メダル」及ヒ本山參拜優遇證ヲ下附ス

佛教日曜學校獎勵ニ關スル件(大正四年七月)

門末 一般

今般御舉行御大典記念トシテ佛教日曜學校規程ヲ制定シ本宗ニ諮ノ教議ニ依リ特ニ兒童ノ徳性ヲ涵養セントス是レ即チ大悲傳化ノ一助ニシテ護國扶宗ノ基亦實ニ茲ニ存

(折返シ)

救はるる嬉しきよ

いざこく來よ此の集團

二 怒り憎み愛し嫌ふ

幾多の咎多き罪

かくて終に沈む我等

導きます御手たふこ

三 行く手暗きよみちの旅

絶えず守る父の慈悲

何に喩へん此の悦

いざや讚へん我が幸を

樂しきまとゐ

一 樂しや清き此のまとゐ

ス故ニ既設ノ地方ニ在リテハ彌々之ヲ擴張シ未設ノ地方ニ在リテハ速ニ其實ヲ擧ケ組長管事ハ其獎勵ニ努ムヘク此段特ニ訓告ス

日曜學校認可願書式

佛教日曜學校開設認可願(組長ノ奥印、管)

今般佛教日曜學校規程ニ依リ何日曜學校(何少年會開設致度候間御認可被成下度別紙規則書相添へ此段相願候也

何教區何組何寺住職

年月日、何日曜學校擔當者 何 某御

執行御中

規則書

一、規則書ニハ左記各項ヲ規定スルヲ要ス
名稱、位置、目的、課程、職員、校務、(會計其他)

佛教日曜學校の使命と

施設の精神

その一 佛教日曜學校の使命

日本が過去五十年間兒童教育に全力を傾倒した結果、小

榮の花は永劫に咲き
 生命の泉 絶えず湧き
 御親は慈悲の御手のべて
 呼びます御聲さやかなり
 二 樂しや清き此のまごゐ
 けがれし罪は ここに消え
 底なき痛 ここに癒え
 此上なき幸を身に受けて
 永劫の國行く子となりぬ
 三 樂しや清き此のまごゐ
 悦び勇み聲あげて
 佛のめぐみ讃へばや
 妙の御光 ほがらかに

學教育は長大の進歩をなし、現今世界中第二位若くは第三位を下らない迄の好成績を擧げ得た事は、如何にその努力の効果の著しいかを語つて居ます。此の如き努力を以て更に兒童を宗教的に導くならば、今後は更に偉大なる教育的効果を擧げ得るに違ひありません。基督教が兒童の宗教心養成を布教傳道の基礎として居ることは、彼等が「兒童と學者は教會の基礎なり」とか、「七歳未満の兒童を我に與へよ」と云へる言葉、並に日曜學校に對する確信と努力によつて想像に難くありません。殊に開教地に在つては、「大人の信仰は本來固有の宗教思想のために動搖する憂があるから、金剛不壞の信仰者たらしむるには須らく兒童よりすべし」として、如何なる困難なる土地にも日曜學校を開かない教會はありません。之と共に、傳道が識者の理解を求むるため學生を中心として、教會の大多數が學校所在地に設けられて居ることは、並に主に女子を對手とし、子孫にその信仰を傳へしめんとして、女子教育に力を注ぐなど、その抱負の一斑を伺ふに充分であります。

我國の佛教は明治の初め、無謀なる政治家の壓迫によつて堂塔佛像を破棄せられ、僧侶は選俗を強ひられ、國民

かがやく此處の此の庭に

報恩講の歌

一 和歌の浦曲の 片男波の
 寄かけよせかけ 歸る如く
 我世に繁く 通ひ來り
 二 佛の慈悲 つたへなまし
 一人居てしも 喜びなば
 二人と思へ 二人にして
 喜ぶをりは 三人なるぞ
 三 親鸞なれ
 名残の御言 さやかにして
 御名よぶ聲を 慕ひ來まし

一般には宗教無用の悪思想を興へ、尙又その前教育の獨立によつて兒童教育は僧侶の手を離れ、寺院は社會と全く直接の交渉を斷つてしまつたに拘らず、今迄その生命を持續して來た事は、一面には寺子屋時代に寺院及僧侶から恩恵を受けた人々が、今尙多數に存在して居る結果であつて、兒童時代に受けた感化の偉大なることを知る事が出來ます。宗門の繁榮さかの方面はさて置き、單に兒童自身に就て考へても兒童時代は青年期に信仰に入るべき階梯であつて、老年になつては容易に信仰を得られないことが明白になつた今日、兒童の宗教教育は更に層一層大切な事と云はればなりません。

然るに明治二十三年發布された小學校令に文部當局が宗教教育を除外した事は、兒童に宗教教育を興へることは尙早か不必要と云ふのが理由ではなくて、雑多の教派を有する日本では、到底實行し得ない事が原因となつたのです。尙又不必要を原因の一部としたとしても、現今ではかゝる事のある筈はありません。兎に角小學校に宗教を除外した事は教育發達の上に便宜を計つた爲めで、歐米諸國が日本の教育方針を羨望して居るのは、その實際上の便宜の點にあるので、決して宗教の無用を認めて

法の集團の 御座毎には

御影をうつし 臨み給ふ

四 若し夫れ知識の 教なくば

永久の闇路に 迷ひぬらん

御心こめし 君によりて

今し佛の 慈悲にあひぬ

五 喜たかく 胸にあふれ

嬉しさ深く 肝に銘す

身は粉に 骨は碎きてしも

報いがたなき 君が御徳

聖徳太子奉讃歌

一 薫り懐しき橘の

都に生れ給ひにし

聖徳皇の功績は

國の光りを顯はせり

二 二十餘年の其間

身は攝政の職に在り

十七條の憲法を立て

國の掟を爲し給ふ

三 わきて妙なる御佛の

教へを弘く世に傳へ

斯て御歳四十九の

二月に薨去たまひけり

四 されど尊き斑鳩の

君の御徳は何時までも

居るからでないことは勿論であります、

それ故フランスの如きも日本に見倣つて、一八八二年宗教を教育より分離することはしたが、兒童の宗教心培養に非常な缺陷を認め、日曜以外更に木曜日を休業としてその日は小學生全體寺院に集り宗教教育を受けることにし、政府は寺院教會に多大の補助金を出して居ます。

ドイツでは宗教道徳を以て道徳の根本として居るから宗教教育は最も完全に行はれて居り、且つプロシアに於ては一八九二年法令によつて、宗教科の時間を増し、僧侶の大多數を郡視學に任じ、一九〇六年には學校維持法で宗教學校の創立を奨励して居ます此等の事は宗教教育の完成を期するための努力であります。

英國では宗教を倫理と并行せしめる主義で、小學校では一般に宗教科を置かないが、授業の前後に宗教の時間を置き、或は授業の後に僧侶が來て説教をします。修身科に於ても教師は宗教を根據とし、重に聖書によつて道徳を説いて居ます。その他ベルザックの如きは宗教科を必須科とし、オースタリアの如きは宗教科のない小學校の設立を許さないこと云ふ位で、此等の諸國が如何に兒童の宗教教育を重視して居るか判ります。

米國では私立の學校だけは校内の教會で宗教教育を施し禮拜をも行つて居ますが、公立の小學校では宗教を課して居ませぬ。之は米國には世界の宗教の輪を總てが、雜然と存在して居ますから、小學校に宗教科を置くことが實際上困難なからです。従つて小學校以外に宗教教育を施す機關が必要となり、その結果日曜學校の發展は實に驚くべきものであり、最近の調査によると、北米全體に於て新教の日曜學校數十九萬五千三百四十三校、教職員百八十七萬四千七百〇五人、生徒數千八百七十六萬三千六百四十九人と云ふ多數に上つて居ますが、舊教その他の宗教を加算すると更に莫大な數で、尙年々非常な勢を以て發達して行きます。そして日曜學校關係者の最近問題として居る所は、國立日曜學校大學の設立、不具者低腦兒の特殊日曜學校設立、有給教師の設置、宗教會議に於ける日曜學校關係者參列數の増加、日曜學校特殊の儀式制定、諸種の懸賞問題の計畫等で、殊に最近心理學社會學等の原理に立つて社會的色彩の濃厚な青年會、婦人會、共勵會宗教前進運動などが起りつゝあるのは最も注目すべき事柄で、此等に對する政府、教育家等の應援も亦實に非常なものであります。今秋東京に開かるゝ萬

富の小川の水清く
絶えぬ御名をぞ止めける

御法の春

- 一 山にも野邊にもおりなす錦
照り添ふをりから聖人は降り
傳へし佛の妙なる法に
永久我が世は春とぞなれる
- 二 此處より溢るる惠の水は
萎びし草木に又なき生命
ここより聞ゆる救の聲は
惱める心に此上なき希望
- 三 星霜移れど移らぬ春よ

- 四 浮世の旅路に疲れし我等
さやけき御聲に呼びさまされつ
清けき流にけがれては消えて
佛のみ前に立つ子となりぬ
今日しも尊き御法のつとひ
- 五 大谷聖人の昔をしのび
同胞もろとも教のままに
佛のみ名もて此の春讃へん

國日曜學校大會の如きも此宗教運動の一つであります。多種多様の宗教を雜然と有することに於て、米國に酷似して居る我國に於て、小學校に宗教科を扱はない事が不得止事とせば、政治家や教育家は宗教を理解し、私情偏見を去つて米國の如く、宗教家と戮力協心して兒童教養の大目的を達せねばなりません。更に吾人は是非佛敎日曜學校を創設して、その缺を補ふべき一層重要な義務があります。社會の大部分が現實主義、物質主義を謳歌し、或は不健全なる迷信の傘下に蟄集して居る現今、尙舊態のままに古い方法により、十年二十年少しも變らぬ對機に、同じ布教を繰り返すのみで、嘗て佛敎を知らざるもの、無信仰者などに稀有の勝法を傳へ弘めやうとせなければ、尊い佛敎も遂に社會より影を没し社會は堅實なる宗教を失つて實に慘めなものとなつてしまひませう、この事實により第一に佛敎を知らざる者並に無宗教者に宗教を保たしめることは吾人の大責務であつて、その方法としては米國の現今に鑑み、かの日曜學校を他山の石とし、更に優越なる我佛敎日曜學校を創設し、青少年に向つて健實なる宗教的信念を鼓吹しなければなりません。實に佛敎日曜學校はこの大使命を以て生れ出でた

もので、青少年の宗教的情操を養ひ、有爲の人格を育成することは、實に之れ吾人の宗教的奉仕であると共に、大なる社會的奉公であります。釋尊の教を奉ずるものは僧俗男女の區別なく、皆力を合せて、この大目的のための第一方法たる佛敎日曜學校を創設し、來るべき社會をして、眞に宗教的に目覺めしめねばなりません。

□その二 日曜學校施設の精神

更に日曜學校施設の根本精神について一言するため、少しく兒童の宗教について考へて見ねばなりません。凡そ兒童に宗教的思想の豊富に存在することはそれが宗教的本能の表現に基くか、父母の教誡、師友の感化等社會的環境の影響に依るか、若くは兒童の特性たる模倣と服従とから來るものにせよ、何れも多量に宗教的受容性の存在を認めなければなりません。此事を「道德的陶冶の研究」には「兒童はその本性として疑問を挟まずして教師父母又は長上の教誡に服従し、或はその行動を模倣するものなり。さればその神佛の存在を肯定するは自然の數にして」と云つて居ます。更にシエムス、ビー、アワットの「宗教的信仰の心理學」には兒童の宗教に就て「抑々兒童は何故に神の信仰を起すが、曰く兒童が神を信

花祭の歌

- 一 お庭は櫻の花の幕
草の梅もやはらかに
今日は嬉しい花祭
佛の前で、私等は
唱歌うたうて遊びませう
- 二 皆さんおいでよ暖く
野草を渡る春風が
なかよく遊ぶ私等を
かはゆがられる御佛
心のやうに吹いて来る
小枝に鳥がよい聲で
- 三

することを教へられたからであつて、この例外となるものは極めて稀である………兒童は信するやうに教へられたから信する云ふことは宗教心理學上の問題に關して述べられた説の中で最も眞理に近いものであると思ふ。これよりもつと完全なる素朴的信仰の宗教を見出すことは出来難いだらう。兒童はその話し聞かれたことは總て之を信せずには居られない、彼にさうして聞くはやがて信するのである。斷定の世界と眞理の世界とはまだ分離せず、その見その聞く一切の事物は必然的に實在の色彩を帯びて居る。それで兒童はその話さるゝことは出来得る限りすべて之を受け容るゝものである」云つてシン女史の説を引き又サリー氏やバインズ氏の報告をのせて「蓋し兒童はその見聞き経験する事柄を殆んど總て眞と認める、絶對的信認は兒童の特性である。そして其信する云ふことは兒童にとつては自然的で又必然的で疑惑と云ふことはまだ兒童に殆んど全く知らない」云ひ之を要約してスタンレーホール氏に倣ひ「兒童が妄信性に富み父母師長の言葉を容易に妄信することは催眠術にかげられた人が施術者の誘導に感じ易いことよりも尙甚しい」云つて居ます、尙この妄信期は普通十歳頃で轉

- 春のなさを歌つて
いつしよに揃うて私等を
いつも勞り下される
佛の慈悲を讀へませう
花で此の世が、かざられる
嬉しい春を、つかさどる
お方がもしも、あるならば
此の世に一人なつかしい
お慈悲の高い阿彌陀様
(折返シ)
 - 五
- ### 宗祖降誕會の歌
- 一 我等が父なる御佛は

換し始め漸次懷疑的時期に入つて、兒童が批評的態度を取らうになつて来るが、この批評的精神が兒童を懷疑に陥らしむると共に、全體から見ると、その宗教的信仰を益強固ならしむるに與つて力あるもので、理性が屢々眞にその信念を鞏固ならしむるは疑を容れないたまゝ、兒童の時代に少しも宗教的教訓を受けなかつたものも本來の理性で或種の神の信仰を生ずるものもあるが、之は極めて少數の例外であつて、多數の者は其教育を受ける迄は何等の神學的觀念もたなかつた云つて居る。尙又その例外も或種の信仰であつて眞正の宗教的信念の基礎にはなり得ないかも知れないと云つて居る。之を要するに兒童の妄信期に於ても懷疑的時期に於ても愈々適當なる宗教教育が必要となつて来るのであります。然るに一方兒童に與ふる宗教は何所迄も兒童の宗教であつて大人の宗教をそのまま注入すべからずとして、「道徳的陶冶の研究」中に五種の要件を擧げ、第一兒童の宗教は樂觀的なることを要し悲觀的なるべからず、第二實利的鬭争的なるを要し、禁慾的犠牲的なるべからず、第三現在的なるを要し、來世的心靈的なるべからず、第四個人的なるを要し社會的なるべからず、第五感覺的なる

自ら慈悲の使者となり

今日の善き日に生れましぬ

祝へ祝へ

二 御年九歳の稚子櫻

散るや比叡の山あらし

我等が爲とはいはほしや

讃へ讃へ

三 六角堂の夜半の夢

流も清き吉水の

御法は永劫に榮え行く

歌へ歌へ

四 我等罪ある人の子の

自ら力及ばじと

易き教を開きます

來れ來れ

五 我等御親の手に依りて

今は救ひの船にあり

悦び勇みて父の名を

稱へ稱へ

秋のあつまり

一 涼しき風 さやけき月

み空高く 世は清し

待ちに待ちし 木木の果

今ぞさかり いざ集へ

(折返し)

を要し抽象的なるべからずとして居ます。此説によれば全然高尚なる宗教を兒童に宛がふことは出来ないやうですが、決してさうではありません。此點は吾人の餘程注意を要すべき事で間違の生ぜぬやうにせなければならぬ所であり、即ち此説は兒童の神佛に對する信仰が自己の主觀を放射したものでその宗教は現在の活動的であるがため、求樂避苦の觀念も個人的實利的感覺的のものであるから未來的靈的宗教を兒童教育の主體とすることを拒んだものである故に同書に於ても一方には「然りと雖、その豫備的意味に於ける修練は決して不可能を意味するものに非ず、何となれば元來兒童の發達は非反省的より反省的に、外面的より内面的に習慣的より自覺的に向ふものなれば、その非反省的外面的習慣も將來の反省的內面的自覺的發達の一重要階段をなすべきものたるは言を俟たず然らば此段階的意味に於て茲に應報の信仰を養はんとするも亦其益に非ずと信すればなり唯之を本體とすべからざるのみ」と云つて居ます。即ち眞に宗教の自發的覺醒を來し理性的合理的に解釋を求めんとするのは正しく青年期に入つてからの事であるから、眞實に宗教教育を施すためには青年部の開設が最も必要なのです

から出來得る限り日曜學校に附隨して青年部を開設し極力信仰の鼓吹に勉めて頂くことが必要であるが、自發的に宗教的覺醒を來すべき兆候は既に兒童後期に現はれ來るのは事實だから青年の宗教に達する豫備的教育として本來の靈的宗教をよく兒童に適合するやう實利的肉感的現在の説いて徐々に宗教心を啓培することは最も緊急事であり、之を要するに日曜學校施設の根本精神は是非共信仰に基く兒童の宗教を育てなければなりません。若し夫れ兒童には眞の宗教を説くべからずとして之を放任し、若くは假令日曜學校を開設するも日曜學校の根本精神を忘れ、單に兒童の集合場たらしめ、却つて無きに如かざる結果を招かざるやう努力したいものである。日曜學校施設に急なる際は形式の整頓に惟慮し或は外觀の盛況を切望する餘りともすれば日曜學校の根本精神が兒童の宗教心が啓培にあることを忘れ、布教精神を設却し教育上却つて有害なる種々の行事にのみ奔走し日曜學校の名によつて兒童を遊ばせることを以て満足するに至り遂には訓育的精神を念頭より去つて更に怪事をもせぬやうになります。吾人は飽く迄日曜學校の根本精神は堅實なる信仰中心主義に基く兒童の布教なることを忘れずに

此事案を擴充したいものであります。(稻田龍省述)

家庭に於ける宗教教育

世の中が段々忙がしく

なつて來ると、眼の前のことだけが、無體に凝り出して、却て大事なことに手ばかりが出来るものでありますから、氣を付けねばなりません。子弟教養の如きことも生存競争が烈しくなるにつれて父兄達は成績の順位や點數のやうなものにだけ眼を着けて、却つて其の外に大事なことのあるのを忘れてゐるやうな氣が致してなりません。

申すまでもなく子弟教養の根本義は、品性の陶冶にあることですが現時此の方面の注意、就中兒童の宗教々育といふことは、段々疎かになつて來て、家庭でも學校でも、忘れ勝ちになつてゐるではなからうかと思はれます兒童の宗教々育は最も大切なことであつて、我が本願寺が大正四年以來御大典記念事業として日曜學校經營に獎勵に力を盡してゐられるのも其の爲めの施設でありますそれで子弟教養の立場にある方々は、つとめて日曜學校が發展して、その目的を貫くやうに盡力して頂きたいと

秋は來ぬ 野も山も
豊けき木の實 みちみてり

二 長閑けき日に 咲きし花は

其のかけだに 失せにしを
何時ともなく 忍びし實は

枝たわわに 美しく

三 雨や嵐 憂き日つみて

堪へ忍びし 花の木の

勝ちほこりし 小枝高く

結べる實の 雄雄しさよ

四 御親の手に 培はるゝ

我等も亦 花の身よ

御名の露の惠受けて

美しき實を 穫り入れん

追弔の歌

一 みほとけの 御國に往きし

君をしも 思ひぞ出づる

なつかしき 君のおもかけ

佛の御名 呼べば浮みぬ

二 春の日の 花の下かけ

秋の夜の 蟲なく庭に

手を取りて 御親の慈悲を

喜びし 君ぞこひしき

三 今日はしも 御法のむしろ

ひらきてぞ 君らむかふる

のであります。が、たゞこれ丈で、兒童宗教々育の總てを終へたといふことは出来ません。一方家庭に於ても特に此の點に力を注いでもらばなければなりません。家庭は兒童の心情を哺み宗教的訓練を施す上に於て、小學校や日曜學校以上に強い徹底力を持つて居るものであります。而して殊に婦人は最も兒童に親しむ地位にあるものとして、其の訓化力も甚だ強いものであります。さて

宗教教育とし言へば

すぐに兒童にはそんなことは可能でない、又必要でもないと思ふ方もあり、又さうでなくとも左様に熱心せられない向もあるかも知れませんが、私に言はせることこれが抑の間違であります。宗教々育は子供に可能です、心要です。一體宗教といふ事と安心といふことを同意味に解すべきものではありません。安心を獲得さすといふのなら子供には不可能であるといふ議論もないではありませんが子供を宗教的に育て行くといふことは、學者の等しく認めてゐるところであります。

宗教々育と言つても、何も子供に持つてゐないものを與へるといふ意味ではありません。抑教育の原語たるエテケーションはエテケートに發したので即ち引き出す

いざ來ませ み靈よここに
残りたる 友ぞつとへる

四

今日ぞしる み佛のこころ
先立ちて ゆきし君こそ
みほとけの 我を導く

ありがたき 御使なりき

五

あなうれし み佛の慈悲
我が胸に 今ぞみちぬる
いざ我等 ほとけの御名を
となへてぞ 君にむくいん

一切衆生悉く佛性を

有するといふのは幾歳以後から持つやうになるといふのでありません。子供の時、赤ん坊の時、否胎内にある時、既に佛性宗教心を持つてゐるのであります。宗教心といふのは確かに人の本能として生れながらにして持つてゐるもので、縱令これを導くことがなくても、獨りでも或程度の宗教を形成するのであります。それで獨りでも形成する宗教が邪悪又は劣等なものにならぬやうに、大聖世尊の説き給ひし妙法を傳へて本具の佛性を引き出し哺んで行くといふのは教育の任に當るものゝ當然の義務であります。それを唯お寺さん丈に任して置くといふのは子供に對する親切でも慈悲でもありません。春になつて木の枝に花が咲くのはその時に出来たものでなく、

ちやんと冬のうらから冬芽として蓄へられたときに花となる素質を保つてゐるやうに、いかなる本能も既に幼児の間に存在してゐます。彼の比較的の後に成つて現はれて来る性慾の如きも、精神分析學の泰斗フロイド氏等の説では、既に幼少の時に其の萌芽があると申します。宗教的本能も亦幼少の時からなんです。さて

折角具へてゐる本能も

之を教養することを怠つたら、頗る不結果に終るものです。動物心理學者の實驗では、彼の生れ乍らにして其の親の後を附け廻る子猫ですら、生後直に頭に袋を被せて一週間を経過すると、もう親猫の後を附け廻らなくなるものださうです。して見れば宗教教育の大切なことは自ら明かな道理で、片時も怠つてならぬといふことになり

ます。蓮如上人の仰せに「わが妻子ほど不便なることなしそれを勸化せぬはあさましきことなり。宿善なくばちからなし。わが身ひとつ勸化せぬものがあるべきか。」とありまして、これは近きより遠きに及ぼす上人の布教の御精神と伺ひますが、自分が御慈悲に目覺めた仕合せを喜んでゐて、そして兒童にそれを勧めないのは、父兄たり母

姉たる人の慈悲であらうとは思はれません。安心決定出来たかどうかといふやうなことは、佛智見に依るにあらざれば、凡夫の窺ひ知る所ではありませんが、しかし助縁又は宿善あるにあらざれば、できないことでありまして、幼少の時からあらゆる機會に佛縁を結ばせなければなりません。子供が譯は分らなくても佛壇の御前で合掌禮拜したり、御内佛の御給仕のお手傳ひをしたりするのはいかに其の麗しい心情を引き立てることでありませう。

世の中は今金だけが光る

やうになつて進んでゐます。こんな時に生ひ立つて見る物聞く物金の光りや、其れを求めするために騒いでゐる響きの中に、大事な子供時代を過さねばならぬ、今の少年は一面から非常に氣の毒なものと言はなければなりません。それを其の儘放つて置くうちには、その成人の曉に、今よりもつと程度に進んだ物質社會を形成するやうなものになりはしますまか。いかに時勢の進運は言へ、次の時代の善悪は、現代を背負つて立つものが責任を負はなければなりません。而して縱令世の中が時勢の傾向として、そんな渦巻に押し捲かれて行つてゐる中にも

自己心内の苦悶といふものは、常に雷霆の響きを轟かさずには置かぬといふのは、抑凡夫に通ずる自性なんでしょうから、宗教に育てられない子供は行末非常に可哀相なものです。私は常に思つてゐます。幕末に至る迄の教育といふものは寺子屋の門から出たものであつて、其の間宗教教育といふことが始終行はれてゐたにも係はらず、維新の際廢佛毀釋の騒ぎにつれて、宗教は全然教育と分離されてしまひましたから、小學校は日進月歩しましたけれども、人間の品性を涵養する根本要諦が全然抜きにされて仕舞つたやうな譯になつてゐます。何と残念なことではありませんか。それでこの現代教育の缺陷を補ふ意味から申せば佛教日曜學校の使命といふものは誠に重大なものであると共に家庭に於ける宗教教育が頗る必要であることを痛切に感ぜざるを得ません。それで平素

家庭では御佛内の御給仕は

つとめて子供にも御手傳ひを務めさせやうにして下さい。朝夕の禮拜進んでは父兄動行の助音も有り難いことです。新しい着物を縫つてやつたら、その初着のとき御内佛様に御禮を申させやうにしてください。御飯粒を零したりするのは冥加に叶はぬと教へて下さい何事も御冥

見を恐れるといふやうな敬虔の念を持つやうにしなければなりません。今や冥加といふやうな思想は次第と現代人の頭から取り除かれやうとする時です。私は或都會の子供に「そんなことをすると罰が當るぞ」と云つて悪事を戒めましたときに、子供はホカンとした顔をしてゐました。彼等は佛罰とか天罰とかいふことを存じなかつたのです。親たちはそんなことを教へてゐなかつたので、これでは恐ろしいものは法律以外になくなる人間が出来てくるもの無理はないではありませんか。社會の制裁がどのに随分良い加減の場合があります。良心の權威がどの點迄、人を戒めつゝあるかといふことは佛法力に目覺めた人の具さに知つてゐられることだから今更申しません

次には子供に、生物を憐み

虚言を吐かず、三度の御飯は戴いて食べ、かれんくお念佛を申すやうにお勧め下さい。小さい時からそんなことをやらせぬと、佛法の御縁が末廣がりに段々遠くなりまします。今では佛法のない家庭に育つた子供に、念佛を勧めても、笑つてゐて俄に承知致しません。珠數を掛けて合掌することすらこきまり惡さうな顔を致します。子供は心の草木の芽生のやうに育て方一つで色々になります

未だ知らぬ人なら致方はなしとして、御慈悲を喜ぶ人として、少くとも自分の子弟に宗教教育を施して下さい。佛法は老人だけの嗜みではありません。「わかき時佛法はたしなめさ候。さしよれば行歩もかなはず、ねぶたくもあるなりたどわかきときたしなめさ候」とは蓮如上人の御誠めであります。世間多くの親達は財産だけを子孫に残さうと働きます。西郷南洲は「兒孫の爲めに美田を買はず」と吟じてその子孫が志を堅くし玉碎の美を尊ぶやうに心を掛けました釋迦牟尼世尊は、一子羅睺羅のために「滅ざる寶を與へよ」と言つて無價の至寶を與へんことを教へられました。(多田澄圓)



日曜學校用品

(本願寺學務部指定)

日曜教園

教材の提供、教法の研究等をなす機關雜誌月一回
日發行一冊稅共拾五錢

正信偈

大形片假名一冊代 三、五 小形平假名 三、〇
小形片假名 三、〇

讚佛歌

略譜 一八、〇 兒童用 五、〇

カード

常用カード 一〇〇枚 四五、〇

出闕表用紙

一〇〇枚 一〇〇、〇

校旗

三五、〇〇〇

徽章

兒童用 一三、〇 教師用四三、〇

日曜學校講習會講習錄

第三回分 七〇、〇 第四回分 七〇、〇

凡例

本書は日曜學校經營法の一例を掲ぐるため、主として佛
教中央日曜學校の施設に基き併せて各家の意見をも斟酌
して編纂せるものなり、斷簡零墨素より體を成さずと雖
將來宗教界の一大問題たるべき日曜學校擴張の上に些の
貢獻する所あるを得ば編者の幸とする所なり、大方識者
の是正を俟つ今は主として少年部に關するものを掲ぐ若
し夫れ青年部は他日を期して上梓する所あるべし。

編者 多田澄圓識

大正九年七月十五日印刷
大正九年七月二十日發行

(非賣品)

編輯兼發行者

岸 興 詳

印刷者

京都市木津屋橋通堀川東入
井 出 時 秀

印刷所

京都市木津屋橋通堀川東入
六條活版製造所

發行所

本派本願寺學務部

285
15

終

